水資源

水循環社会

303-1

基本的な考え方・方針

当社が提供する商品は、原材料の大半をサプライヤーから調達しているため、製造時の水の直接利用量は少量です。しかしながら、サプライヤーがパルプ・紙等を製造する工程においては水を必要としているため、限りある水資源を有効に活用する必要があると考えています。水の保全については、「ユニ・チャームグループ環境基本方針」に沿って、事業活動全体の水リスク調査とその対応、生産拠点の取水量削減、水の循環利用や浄化を行っています。
また、取水量については、毎年前年比で1％削減することを目標に掲げて活動を推進しています。

水資源におけるリスクと機会

当社は、水資源枯渇を遠因とする森林由来の原材料(パルプ・紙等)の供給不安定化による操業度低下をリスクと捉えています。世界資源研究所(WRI)のツールであるアキダクト(Aqueduct Overall Water Risk map)を使用して中長期的な水リスクアセスメントを行い、特にリスクの高い河川流域で操業するサプライヤーに対して、水資源管理を徹底しリスクの低減に努めるよう要請しています。
一方、当社商品は使用時や廃棄において水を使用しない点は機会であると考えており、ライフラインの整っていない渇水地域や被災地では当社の商品の強みが発揮されます。このような場面に積極的に関与することで購入を促す活動を推進していきます。

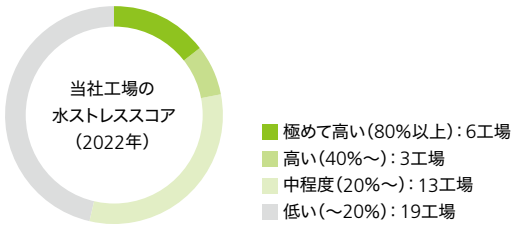
マネジメント体制

当社は年4回、社長執行役員を委員長としたESG委員会で水資源に関する重点課題について計画と進捗を共有し、取締役会で承認を得た上で、目標達成に向けたPDCAサイクルを回しています。

P.036 環境マネジメント体制
P.010 ESG推進体制

アキダクトによる水リスクの状況把握と対応

現在、グループ全体の41工場のうち、アキダクトで水ストレスのスコアが「極めて高い」または「高い」9工場を特定しています。また、気候変動などの将来シナリオに基づいて、2040年の水ストレスのスコアが「極めて高い」または「高い」16工場を特定しており、今後水リスクへの対応の必要性を認識しています。
その対応のひとつとして、インドネシアの不織布を製造する工場では、水使用量の約90%を再利用する水循環を達成しており、排水量や排水品質(検査値)について定期的に自治体への報告を行っています。さらに、水源を守るための植樹や下草刈り等の河川清掃、使用済み商品の正しい廃棄方法の啓発も実施しています。



取り組み・実績 303-3

水使用量の削減 303-3

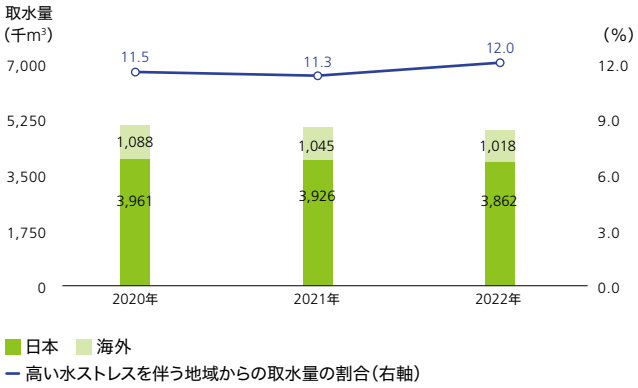
当社は、水使用量を毎年前年比で1%以上削減することを目標として、水使用量の削減に取り組んでいます。2022年の取水量は4,881千m³で前年より水使用量を1.8%削減しました。

※ 一部の工場に推計値が含まれていたため、実績値に修正しました。

▶ 水使用量

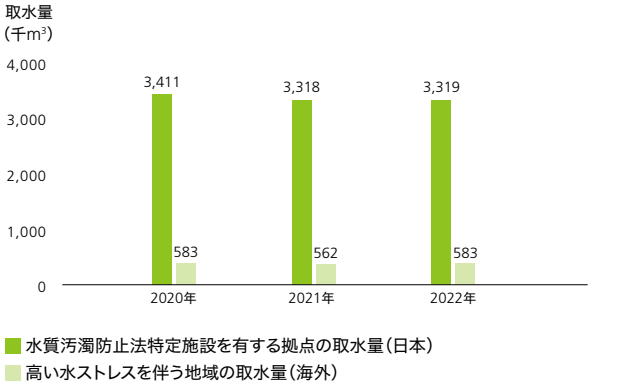
2022年実績
2021年比
1.8%
削減

▶ 取水量推移



P.067 環境データ>水使用量(取水量)

▶ 水質汚濁防止法特定施設を有する拠点の取水量(日本)、高い水ストレスを伴う地域の取水量(海外)



P.067 環境データ>【日本】水源別水使用量 (取水量)、【海外】水源別水使用量(取水量)

水リサイクルの推進

限りある水資源を有効に使うために、工場内で水のリサイクル等による取水量削減に取り組んでいます。水を使用する不織布や紙を製造する工場では、製造工程で使用する水のリサイクルに取り組んでいます。また、インドネシアの不織布を製造する工場では、水使用量の約90%を再利用する水循環を達成しています。

水使用量削減・排水ゼロの取り組み

日本の九州工場では、工場で使用している空調設備を従来の水冷方式から空冷方式へ変更することで、水の使用量を削減し、工場排水ゼロを実現しています。今後は、空調設備を更新するタイミングに合わせて、他の工場へも同対応を展開していきます。

水の消費量および排水量について 303-2,303-4,303-5

当社の排水量の測定は一部拠点となっているため、全体の報告として、取水量＝排水量＋消費量(工場消費＋製品消費)としています。消費量は、紙砂®製造工程と各工場冷却水の蒸発による工場消費、ウェットティッシュやパートナー・アニマル(ペット)フードに含まれる製品消費です。

排水は主に吸水紙製造工程とパートナー・アニマル(ペット)フード製造工程で発生しており、2022年の排水量(排水・蒸気)は4,189千m³でした。排水については、行政の定める排水処理基準を満たす処理を行った上で排水しています。

排水の水質については法規制・自主基準への適合を定期的に評価しています。なお、2022年も法規制・自主基準ともに違反はなく、該当工場では法規制で求められる行政への報告を適切に行いました。また、土壌汚染、悪臭につながる事故もありませんでした。

P.060 【日本】水質汚濁、土壌汚染、悪臭の防止
P.067 環境データ>排水・蒸発量